

椋鳩十さんになりきって、「大造じいさんとがん」の アフターストーリーを書こう

発行
令和3年3月
中部教育事務所



授業者 和田萌花教諭 (南国市立十市小学校)

単元 第5学年 国語 大造じいさんとがん (東京書籍)

単元計画 (全9時間)

第1次 1時 教師が書いた「注文の多い料理店」のアフターストーリー (グッドモデル・バッドモデル) を聞き、続き話作りへの関心をもつ。

～読書タイム
教師の「片耳の大シカ」の読み聞かせを聞く～

第2次 2時 アフターストーリーを書くために、物語の設定を確かめる

3時 アフターストーリーを書くために、大造じいさんと残雪の関係性について考える。

4時 アフターストーリーを書くために、情景描写について考える。

5時 アフターストーリーを書くために、大造じいさんの人物像を捉える。

本時 6時 アフターストーリーを書くために、大造じいさんの残雪に対する見方の変化を考え、大造じいさんの人物像を捉え直す。

7時 アフターストーリーを書くために、椋鳩十の世界観を捉える。

(2～7時) 関連図書も活用し、「大造じいさんならきつと…」などの話づくりのためのアイデアを考える。

第3次 8時 今まで読み取ったことを生かして、アフターストーリーを考え、文章に書いていく。

9時 それぞれが考えたアフターストーリーを交流する。

本時で達成したい目標

◇大造じいさんが残雪を仕留めなかった理由を物語全体を通して考えることで、大造じいさんの人物像を捉え直すことができる。

本時における深い学びとは

◇残雪を仕留めなかった理由を文章全体から根拠を示しながら交流することで、大造じいさんの残雪に対する見方が少しずつ変わってきていることに気づく。

授業の概要

本単元は「椋鳩十さんになりきって、『大造じいさんとがん』のアフターストーリーを書こう」という言語活動を設定した。第2次で、登場人物の人物像や、関係性、表現の効果や作者の他作品から作者の世界観も読み取っていくことで、本作品にふさわしい続き話を書くアイデアを集めていく。

本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1 本時の課題をつかむ 前時に捉えた大造じいさんの人物像 (執念深い・あきらめないなど) を確認し、そんな大造じいさんなのにどうして残雪を仕留めなかったのかという課題意識をもち、学習の見通しを立てる。	・前時に捉えた人物像を振り返ることで、そんな大造じいさんなのに残雪を仕留めなかったという矛盾点に気づかせる。
2 文章全体を読んで、仕留めなかった理由となりつるところに付箋を貼る。友だちと交流をする。 全文シートの該当する文章に「そう考えた理由」を書いた付箋を貼り、それをもとに友だちと交流する。	・全文シートをもとに交流することで、根拠となることが複数あることを実感させる。
3 全体で交流し、話し合ったことからもう一度、大造じいさんの人物像を捉え直す。 作戦をくり返すごとに少しずつ残雪への気持ちに変化が現れてきていることを友だちと共有する。	・児童から出た意見は、文章のどの言葉からそう思ったのかということを見取することができるよう、全文シートに書き込んでいく。
4 学習を振り返る	・今日の学習を終えて、自分のこれまでの大造じいさんの捉えが変容したことを記入する。



授業研究会のポイント

① 「アフターストーリーを書くために」という目的意識をもって単元を進めていく

長年にわたり扱われている文学的教材の学習では、「この教材では、この発問をして子どもたちに考えさせたい」といったものが教師側にはある。もちろん教材の特徴を生かしてのことであるが、児童はその発問について考えることに何の必要感ももっていないということが多々ある。今回の十市小学校の提案は、教材の特徴もふまえながら、「『大造じいさんとがん』のアフターストーリーを書く」という単元のゴールに向かって目的的に読んでいく言語活動を設定した。アフターストーリーを書くためには、物語の設定、登場人物の関係性、中心人物の人物像、表現の効果、作者の世界観について複数の叙述を結び付け読んでいくことが重要で、このことが本単元の重点指導事項「読むこと」工の「人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする」力をつけることに結びつく。児童は、言語活動を通して、教師がねらった資質・能力を身に付けていく。「内容ベース」から「資質・能力ベース」の授業に転換することにより、汎用的な力を確実につけていくことが求められている。



〔十市小の単元のゴールイメージ〕

② 「言葉による見方・考え方」を働かせている姿を具体的に想像して授業に挑む

国語科の教科目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」ことである。国語科は、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。よって、児童に学習の中でどの言葉に着目させたいか、どんな表現をさせたいか、教師側が具体的にイメージをもっておくことが必要である。十市小学校では、教材研究会で単元を検討する際に、「言葉による見方・考え方を働かせる」とはどういうことなのかを共通理解する場を設定した。授業者だけでなく参加者も同じ土俵に乗り「自分事」として、「どの言葉に着目し、どのような話し合いを展開させることが、児童の深い学びにつながるのか」考えることができた。

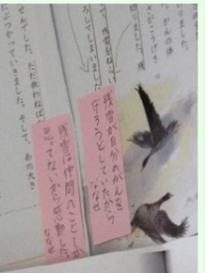


また、学習指導案の中にも、「見方・考え方を働かせている姿」として、児童の具体的な発言を明記することで、授業のゴールイメージを明確にすることができた。本講座の講師である松永立志先生も、「学習指導案は参観者 (読み手) に必要な情報を提供する説明文であり、相手意識をもって書くことが必要である」と言われている。本講座に関わる教職員が、単元の終末における、資質・能力を身に付けた児童の姿を明確にすることは、目指すゴールを共有するためにも非常に重要である。今後も、子どもがどのような見方・考え方をどのように働かせるのかを可視化したり、言葉の力の系統性や言語活動の系統性を明示したりしながら授業を構想していくことが大切である。

③ 全文シートの有効な活用法 ～思考を可視化し、交流することで、一人一人の見方・考え方を成長させる～

本時は、アフターストーリーを書くために、大造じいさんの人物像を捉え直す時間である。前時にも児童は、作品全体を読んで人物像を捉える活動をおこなっているが、大造じいさんが残雪を仕留めるために執念深いこと、仕事に対して真面目であること等、文章から見えてくる人物像をおさえることにとどまっている。そこで、本時はそういった人物像でありながら、なぜ残雪を仕留めなかったのかという問いからスタートし、文章を捉え直す時間である。文章全体を見て、もう一度捉え直したり、友達と考えを交流したりする道具となったのが、全文シートである。

子どもにとっては、全文シートは「物語を読み取るため」「文章を通じて友だち同士で対話をしたり交流をしたりするため」「自分が思ったことや考えたことを説明するため」の道具である。言語能力は見えにくいものであるが、全文シートに書き込むことで、子ども自身が自分の見方・考え方やその成長をメタ認知することへの助けとなり、また教師も子どもの「読み」を見取ることができる。「ねえ、どうしてそう思ったの。」「わたしも同じように思ったけれど、理由の場所が違うよ。それは…」など交流をする際に、お互い見方・考え方を共有することで、子どもたちの学びが深まる。



講師による助言・講話より (前鎌倉女子大学准教授 松永立志先生)

物語文は、「豊かに読む」ことが目標である。個々の子どもの見方や感じ方、想像したことや読み取ったことと、その理由や根拠を話し合い、「共有化」を図ることが「物語の読解能力」を身に付けることになる。